

野長

ひとりごと

(84)

斉藤

讓



昨年の暮、といっても先月の上旬のことであるが、国内でコメ問題が大きな論議を呼んでいたとき、新聞に「韓国大統領国民にわびる」という見出しの記事が載った。記事の内容は、コメの輸入阻止の公約が守れなかったことについて、大統領が国民に直接おわびをしたという簡単なものであった。この時、日本の国会では、部分輸入の受け入れをめぐる、細川総理が国会決議や、与党間の基本合意に反しているのではないかとといった集中砲火を浴び、言い逃れとも思える苦しい答弁をくり返していた。たしかに、このコメ問題は、日本の食糧自給や農業の将来、更には貿易体制にかかわる重大問題であり、輕輕に判断できるものではない。

いことは言うまでもない。韓国とて、この立場に変わりはない。しかし、厳しい最終局面に臨んだ両国首脳の間には、際立つ相違があった。

▼卒直にいつて、公約を果せなかった責任は重い。しかし、それを素直に認めて、わびた韓国大統領の態度は、潔いと感した。それに比べて、細川総理の対応は、これが変革を旗印とし、政治の流れを変えようとして登場した御方かと疑いたくなるほど、前政権時代の為政者のそれと酷似していた。もっとも、韓国の場合は日本より激しい農民の反対運動が吹き荒れたという背景もあつたようであるが、それにしても、お二人の姿勢には余りにも大きな開きがあつたように思う。

基礎食料であるコメの自給は、国民誰もが望むところであり、輸入を望む者はいない。しかし、自由貿易の保障の上に立国の基盤を置くわが国にとつて、輸入阻止を貫き通すことは、極

ろであり、輸入を望む者はいない。しかし、自由貿易の保障の上に立国の基盤を置くわが国にとつて、輸入阻止を貫き通すことは、極

NOといえる政治



▼国際社会の秩序が、国際正義ではなく、国家間の力関係によって保たれていることは、過去そして現在も変わらない。厳然たる事実である。もし、日本がそれを

めて困難なことである。▼国際社会の秩序が、国際正義ではなく、国家間の力関係によって保たれていることは、過去そして現在も変わらない。厳然たる事実である。もし、日本がそれを

視しては成り立たないなどと嘯く楽観論は、とうてい通用するものではない。▼それにしても、この問題に対する自民党の姿勢には、失望感を抱かざるを得ない。ガット交渉は、七年も前の

ある是非の態度でなければならぬはずである。残念ながら日本の政治風土には、この観念が欠落しているように思える。従つて、政治は常に建前と本音を使い分け、はじめに建前、最後は政治決断と称する落としどころ、つまり本音を出すという手法がずっと続いてきている。今日の政治不信の元凶は、まさにここにあるのではないかと思う。

それはとうてい信じ難いことだ。国会決議違反だと詰りめ寄る姿は、かつて自らが批判した野党といささかも変わるものではない。農業保護、食糧自給を叫ぶ衣の下から、党利党略の鎧の影のぞいてくるように思えてならない。

▼痛みを伴わない改革は、絵空事である。もし、それが可能だと主張する者がいたとしたならば、それは欺満者だといわざるを得ない。

貧すれば鈍するという言葉もあるが、悲しいことだ。▼欧米の議会では、与野党で賛否が入り乱れることがよくある。いま日本の政治も、政党政治への道を突き進もうとしているが、制度だけて民主政治は確立しない。

選良といわれる議員の見識こそがそれを決めることであり、その見識とは、責任の心一つにかかっている。